

## 地域医療連携室報

### 新任のご挨拶

松山赤十字病院 副院長 藤井 元広



この平成17年4月1日付けにて副院長を拝命しました。松山赤十字病院の命運を決める要職での責任の大きさに身が引き締まる思いです。当院との連携にご協力をいただいている先生方へ一言ご挨拶させていただきます。

私は広島大学医学部47年卒業で、泌尿器科教室に入局しました。昭和49年4月に松山赤十字病院へ赴任し、白石先生（現名誉院長）と二人で当院泌尿器科の基礎作りを進めました（昭和49年4月～昭和51年8月在職。当時の修練が今の自分の出発点になりました）。その後、広島大学で勉学に勤しみ、昭和56年から広島総合病院泌尿器科部長として研鑽をしました。平成1年9月に再度の当院への赴任となり現在に至っています。その間泌尿器科医・指導医として一生

懸命に診療し、松山赤十字病院を盛り立てることができたと考えており、これも一重に地域の先生方にご支援していただいたおかげだと感謝に堪えません。私は、松山赤十字病院で自分の家族が患者になつたらどんな医療を受けたいかをモットーにして17年間の臨床をやってきました。そのなかで泌尿器科診療での医療の質をいかに向上・維持していくかをたえず念頭に実践してきました。その17年間で

松山赤十字病院も変動し、白石先生が昭和63年に副院長、平成8年に院長に就任され、平成9年頃からの医療政策の変革の先取りとして地域医療連携室が開設されました。（財）日本医療機能評価機構による認定のために、病院全体でそれに向かって取り組んだことがレベルアップとなり、さらにオーダリングシステムの導入を行ないました。そして平成14年に（財）日本医療機能評価機構による更新認定を受け、着実に地域医療の中核の病院になってきました。平成15年に洲上院長が就任し、医療連携の重要性・強化に拍車がかかり現在に至っております。地域医療連携は、住民が地域で継続性のある適切な医療を受けられるようにするもので、病院と他の医療機関が相互に円滑な連携をもち、高額医療機器の共同利用、

共同診療、勉強会などを図るものであると思います。当院の地域医療連携室設置は、病診連携、病病連携に極めて役立ち、将来的な方向付けの一つとしての急性期特定入院加算の取得に不可欠なものはならないものになっていきます（そのクリア要件は平均在院日数17日以下、紹介率30%以上、外来入院比率1.5以下であり、外来入院比率のクリアは今年度中になんとか出来そうです）。外来入院比率1.5以下にしてそれを維持するには、さらに外来患者数を調整していく必要があります。今以上に連携を活発にして逆紹介を心掛けこの逆紹介件数を増やすことは、紹介件数の増加にも繋がると思われますので、クリア要件へのよい連鎖となります。当院では、地域医療機関からの救急的なCCU患者、脳卒中、吐血のホットラインを設置するなど連携室の充実・改善・利便性を図ってきました。そのなかで松山赤十字病院での逆紹介率は、現在60%前後であり、中にはせつ々しく紹介したのにあとは梨の礫では困ると思われている先生方は少なからずおられると思います。そのギャップを減らしていくためにも、連携室のさらなる充実が非常に重要であり、かつ、速さと正確さを柱として、逆紹介率のアップを目指さなければなりません。しかし従来開業医の先生方の、かかりつけ医、での選択は、紹介先医療機関の専門性だけでなく、医師個人の信頼関係、友好関係も大切な要素になると思えます。そのためにも各科での勉強会・交流会・講演会の強化はもちろん松山赤十字病院とあまり縁がない先生方に院外や、医師会の各ブロックへアピールをして顔見

知りになることが必要です。当院の方針は、地域完結型医療における。かかりつけ医の支援病院であり、また地域に支援される病院として患者さまが何時でも何処でも良質な医療を受けることが出来るようにすることであり、さらには患者さまが本当に知りたい情報が何かを知りそれに応えることや、満足した医療をうけたことなどが、紹介していただいた先生方に確実にフィードバックされるように努力をすればより良い連携になると思っています。

私の副院長としての仕事は、患者サービス改善、診療情報管理、広報などの委員会をまとめることとあります。紹介した医療機関は、患者さまがどのように診療され、その後どのように診断・治療されたかを早く知りたい気持ちにかかると思っています。したがって迅速にその情報を紹介先に提供す

ることは、患者の適切な医療・療養を受けたというニーズに応えたことにもなり、良好な連携は患者サービスの一環になると考えています。このように医療連携と患者サービス改善委員会は密接に関連しており、その他の委員会も同様であり、そのような認識のもとに着実に進めていきたいと思っております。好きな言葉である「努力。一日一歩」をモットーに頑張りますので一層の連携をよろしくおねがいします。

## 新任紹介

### 事務部長

元岡 孝道



元岡 孝道

地域医療連携医療機関の先生方には、日頃から当院の業務推進に格別のご協力、ご支援を賜り誠にありがとうございます。4月1日

に着任しました今井の後任の元岡でございます。

この3月までは、医療とは殆ど無縁の新居浜市にある社会教育施設愛媛県総合科学博物館で、副館長を務めておりました。

私が病院に勤務するのは今回が2度目となります。昭和56年から61年にかけての6年間、県立今治病院で、主に医薬品、医療機器や診療材料の調達に従事しまし





た。従って、病院の何であるか、や、特有の雰囲気については、ある程度分かっている積りでおりました。ところが、20年ぶりに医療現場に身を置いてみて、医療の世界の大きな様変わりには、驚きと戸惑いを感じています。病院としてのスケールの違いのこともありますが、医療機器や技術、システムの高度化、関係する法令等の多様さや煩雑さ、さらには、医療を取り巻く社会情勢においても、医療の世界をマーケットとして捉える人々の市場原理主義による株式会社病院経営への参入や、混合診療導入への動きなど、およそ、20年前には、想像もできなかった大きな変革のうねりのあることを知りました。現在の私の心境は、全くもって今浦島の如きものです。

ところで、私は、20年来の高血圧症患者で、長年病院に慣れ親しんできた者です。転居を契機に昨年の11月の或る日、当院へ初診患者として来院しました。ところが、問診表をひと目見た先生曰く「あなたのような患者は、開業医の方へ行きなさい。」私は、一

瞬唖然としましたが、病院勤務の経験から、瞬時に先生の意図を理解しました。高血圧は慢性疾患の代表格であり、私の症状はここの何年も変化はなく、さほど重くもない。と、すれば受診に便利な近所の開業医のほうが適当。紹介を受けた病院は、平日は18時迄、土曜日にも開業している。勤めをもっての私にとって極めて都合なのです。

こうして私は、自らは知る由もなく、地域医療連携の輪の中に身を置き、実地に連携の成果を体験していたのです。

当院ではこの3月、測上院長を始めとする医療スタッフの懸命の努力により、ついに地域医療支援病院指定要件を達成することができました。5月には審議会が開催され、承認が得られることは間違いないことと思われれます。

当院の関係者の努力はもとより、地域医療連携医療機関の先生方のご協力、ご支援の賜物と感謝を申し上げる次第です。今後ともよろしくお願いいたします。

## 第四内科部長(総合内科) 岡田 貴典



岡田 貴典

部長就任に当たっての自己紹介という事で、紙面をお借りすることになりました。当院へは卒後研

修2年目と、平成5年からもう一度、松本勲先生、城口朝雄先生、高上悦志先生ほか多くの先生方のご指導を受けながら勤務して参りました。長くいる以上はそれなりの責任を果たすようにというお叱りの意味での任命と感じております。現在内科外来に2診、総合内科という表札が掲げられました。丁度今年の日本内科学会で、総合

性と専門分化の両立についての議論がありました。随分以前からの問題で、医療の高度化、細分化からくる弊害に対応するために総合診療部あるいは総合内科といったものができてきました。各医療機関によって事情が異なるようです。中におりまして各専門内科が豊富で充実しているというのは当院の特徴の一つと感じておりますが、言うまでもなくそれぞれ先生方は全体を診る目を忘れてはたくさんの紹介をいただいでい

る中で、専門科が特定しにくい症例につきましても紹介をいただける窓口になるのが私どもの一つの役割ではと考えております。血液、感染症、膠原病を中心とした愛媛大学医学部第一内科から派遣されましたが、小林譲、藤田繁両教授は分類不能の疾患というのも教室のテーマとして挙げておられました。これまでも多くの紹介をいただきながらご期待に添えない点が多々ありましたので引き続きご指導お願い申し上げます。

## 第二外科部長(乳腺外科) 筒井 信一



筒井 信一

院でも、乳腺外科を主に診療を行なっていくと考えると、乳癌の治療は、いまでも手術が最も重要なと言ってもありませんが、surgical oncologyに基づいた治療戦略が必要とされます。すなわち、個々の乳癌の性格を

私は、この度、外科部長として赴任した筒井信一と申します。私は、昭和60年に九州大学を卒業し、同年、九州大学の第二外科に入局しました。卒後研修のあと、第二外科で、食道癌に関する研究を行ない、学位をいただきました。研究を終了した後は、済生会福岡総合病院や宗像医師会病院で、外科臨床を研鑽しました。平成7年に九州大学第二外科に戻り、平成8年より、2年間、テキサス大学MDアンダーソン癌センターに留学しました。帰国した後は、九州がんセンター乳腺部ならびに国立別府病院外科にて、乳腺外科を主に外科臨床を行なってきました。当

断し、最適な治療法を選択すること、すなわち、テーラーメイド治療が必要となってきています。また、乳癌の治療は、手術ばかりではなく、診断から、化学ホルモン療法、さらに、終末期医療まで、多岐にわたっており、すべてを包括的にこなせる治療を目指しております。

松山で仕事するのは初めてですが、早く地域に溶け込んで頑張りたいと思っておりますので、連携医療機関の皆様のご協力ならびにご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

## 第三外科部長(内視鏡外科) 和田 寛也



和田 寛也

4月から外科の診療部長として赴任いたしました和田です。昭和61年に九州大学を卒業し今年で20年目になります。これまで内視鏡診断治療にかかわってきました。2年目の病院で内視鏡診断(胃カメラ・側視鏡および直視鏡)を研修したことがきっかけで、昭和63年に内視鏡治療が必須の門脈圧亢進症(門亢症)研究室に配属となり食道静脈瘤硬化療法法の硬化剤による腎障害の実験的研究などを行いました。その後は低侵襲治療として脚光を浴びた腹腔鏡下胆嚢摘出術(Lapic)が保険適応になるとすぐに開始しました。ま

た総胆管結石合併例にLapicを行うための内視鏡的十二指腸乳頭切開(EST)を習得し併用療法も行ってきました。Lapicにとどまらず内視鏡外科治療の適応拡大を図り、胃切除(楔状切除、LADG)や結腸切除、虫垂切除、鼠径ヘルニア手術、癒着剥離術、腹壁瘻ヘルニア修復術、脾臓摘出術などを行ってまいりました。とくに最近では鏡視下鼠径ヘルニア手術(TEPP・腹膜外腔アプローチ)を従来の術式以上に確実な診断や治療ができるので第一選択と考え重点的に行っています。開腹による前立腺手術後以外の成人患者さんに適応があります。

## 小児外科部長 財前 善雄



財前 善雄

市立こども病院で外科部長として6年間勤務しておりました。実は、それ以前にも3年間ずつ2回当院の小児外科に勤務しておりましたので、古巣に戻ってきたと言う感じます。

4月より小児外科の診療部長として赴任して参りました財前です。当院に赴任するまでは、福岡

ももとの専門は小児の固形悪性腫瘍で、手術から化学療法まで行っており、前回の病院は、病院の方針として悪性



腫瘍は取り扱わないことになっていましたので、少し寂しい思いをしておりました。しかし、当院では、小児科が積極的に悪性腫瘍の治療を行っていますので、小児外科もその中に積極的に参加してゆけたらと考えております。

一方、前任地では比較的新生児外科症例が多く、多くの疾患の治療に携わってきました。当院では、小児を胎児時代から成人に至るまで見てゆく成育医療センターが稼働しています。われわれとしては、新生児の外科的疾患の出

生前診断がついている場合は、産科、小児科とタイアップして、妊娠中から参加し、計画的な分娩と治療を行ってゆきたいと考えています。この分野も前任のことも病院では、産科がなかったため、行いたくても行えなかったため、積極的に取り組むつもりです。

今回、小児外科は3人とも交代してしまつたので、いろいろ至らぬ点も多いかと存じますが、今までにない特色を出すべく努力する所存ですので、何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

## 第二小児科部長 近藤 陽一



近藤 陽一

この度、4月1日付をもちまして小児科第三部長を拝命致しました。まだまだ若手のつもりでしたが、気がつけば小児科ではすっかり古株になっており、月日の流れる速さを改めて思い知らされております。若輩ながら、当院および地域医療の発展に少しでも貢献できるよう努力する所存です。

さて私が当院に赴任しましたのは、平成14年1月であり3年余りが過ぎました。私はこれまで、平成2年の岡山大学小児科入局以来、ほとんどの時間を新生児医療に費やしてまいりましたが、当院でも、小谷部長はじめ多くの方々

のご指導、ご協力の下新生児を中心とした診療を続けさせて頂いております。この間、小児科を取り巻く環境の変化の中、社会の需要にこたえるべく平成16年7月には松山赤十字病院成育医療センターが開設され、当院の周産期および小児医療は大きな転機を迎えました。すなわち従来どおりの専門医療のみならず、24時間体制での救急医療、育児不安や心の問題を抱えた児や家族へのサポート、NICUの開設、安心できるお産の提供等、さまざまな面において新しい試みを始めました。開設から、まもなく1年が過ぎようとしています。着実に成果が見られる一方で、センターの充実にはまだまだ課題は山積みです。これらの課題に向かう上で、地域の先生方のご協力は不可欠と思ひます。今後とも成育医療勉強会などを通じてご指導いただければ幸いです。よろしくお願ひ申し上げます。

## 第一眼科部長 石川 明邦



石川 明邦

地域医療連携医療機関の先生方には、日頃から多大なご支援を頂き大変ありがとうございます。皆様の御蔭で4月1日から眼科第二部長に昇任させて頂いた石川明邦です。松山赤十字病院眼科には昨年の9月に、副部長として着任し、主に白内障、網膜・硝子体疾患（網膜剥離、糖尿病網膜症、眼底出血など）を担当させて頂いております。愛媛大学眼科学教室（大橋裕一教授主宰）出身で、同教室、鷹の子病院、市立宇和島病院、聖母眼科でも前記の疾患を主に担当させて頂いておりました。当院に赴任し、網膜・硝子体疾患の手術をさせて頂く機会が増え、忙しさに正直目をまわして

おります。しかし、これも地域医療連携医療機関の諸先生方から伝統ある松山赤十字病院への信頼の証であることを考えると、弱音を吐くわけにはまいりません。超人的な能力はないので、日々自己研鑽し、停滞することなく、少しでも多く皆様方の期待に答えられるようにしなければならぬと気を引き締めております。ただし、技巧だけに溺れることなく、医療人としての温かさや優しさを忘れないうようにしたいと思います。激務に耐えるように体力増進にも努めたいと思ひます。まだまだ未熟ではありますが、困っている患者様のためになれるように、連携医療機関の諸先生、院内各科の先生や職員の皆様からのご指導・ご鞭撻をいただければ幸いです。これからも松山赤十字病院眼科（児玉俊夫代表部長）スタッフ一同をよろしくお願ひ致します。

## 麻酔科部長 清水 一郎



清水 一郎

開業の先生をはじめとする地域医療機関の先生方には日頃から御

指導を頂き有難うございます。昨年4月より松山日赤に赴任し、この4月より麻酔科診療部長を拝命いたしました清水です。前任地は愛媛大学医学部附属病院で、6年間集中治療部で勤務しておりました。麻酔・集中治療と言うと地域の諸先生方との直接的な繋がりは持ち難い診療部門ですが、当

院の諸先輩方が急性期病院としての地位を勝ち得ていくべく努力されている中で、麻酔科の役割は決して小さくはないと考えております。当院では急性心筋梗塞・脳卒中・成育医療・消化器関連等の各種ホットラインの整備が進んでおり、今後、各科との連携・協力をさらに密にし、緊急手術麻酔の24時間円滑な受け入れ、救急部とタイアップしての救急重症患者管理など全力を尽くして参りたいと思ひます。

私は、愛媛南予生まれで、随分昔の事になりましたが両親共に松山日赤から黄泉へと旅立ちました。当院に赴任が決まったおり何か運命的なものを感じたものですが、あの頃患者側から感じた赤十字の旗に対する信頼感は今も昔も変わらない様に思ひます。又、その信頼感は地域の諸先生方との繋がりに拠る所が大きいものと存じます。まだまだ若輩者ですが患者様の信頼を裏切らぬよう、諸先生方のニーズに応えられるよう、日頃の研鑽に努めて参りますので、今後とも御指導・御協力の程、よろしくお願ひ申し上げます。

## 歯科部長(口腔外科) 寺門 永顕



寺門 永顕

この度、4月1日付をもちまして歯科口腔外科部長職を拝命致しました。昨年4月より松山赤十字病院に赴任し、常勤医として口腔外科診療を行って参りましたが、院内では口腔外科という診療科に対して、ご理解、ご協力をさせて頂ける先生方も非常に多く、またスムーズに病院に溶け込むことができたため、充実した一年を送ることができました。一方、昨年は松山赤十字病院歯科にとっても大きな転換点となる年でした。紹介率の向上や外来入院比率の改善を図るために、それまでの一般歯科診療を中心とした診療体制か

ら口腔外科を中心とした診療体制に変更することを目標として歯科スタッフ一同がんばって参りましたが、こちらも幸いにしてまずまずのスタートをきることができました。これもひとえに周辺の医療機関、医院、歯科医院の先生方のご理解とご協力の賜と感謝しております。しかしながら、当科が地域医療支援病院の中の一診療科として果たすべき役割を考えると、まだまだ不十分な点も多いと考えます。今後も、より良い患者様との関係、より良い一次医療機関との関係を目指した診療科を作りたいと考えておりますので、連携頂いております地域の先生方のご理解とご協力の程よろしくお願ひ申し上げます。

